

ウェルトウムヌスとしての皇帝ルドルフ2世像

解説 写実と奇想が織りなす人物像の意味

写真：ユニフォトプレス

武蔵野大学非常勤講師 玉井貴子

たくさんのみずみずしい野菜と熟した果物。果物の間からは黄金色の麦やきびがたわわにこぼれ、下方には色鮮やかな花々が咲き誇っている。種々多様な植物が精緻に描写されている本作には一方で、一人の人物の上半身をはっきりと認めることができる。ふっくらとしたりんごおよび桃の頬とさやえんどうの脇の間から、さくらんぼと桑の実の瞳がじっとこちらをみつめているからである。この二重化されたイメージで見る者を強く引きつける絵の作者は16世紀に神聖ローマ皇帝の宮廷で活躍したジュゼッペ＝アルチンボルドであり、本作は皇帝ルドルフ2世をローマ神話の神ウェルトウムヌスに見立てて描いた肖像画である。

アルチンボルドを有名にしているのが、本作のような、多様な動植物が一つ一つ博物学的な精確さで描写されつつ、全体としては人物の頭像として見える奇抜な構成の寄せ絵である。アルチンボルドは1526年イタリアのミラノに生まれ、画業初期を同地で過ごしたあと、1562年に神聖ローマ帝国の宮廷画家としてウィーンの宮廷へおもむいていたようである。彼の寄せ絵はこの宮廷において初めて制作されたと考えられているが、その芸術活動は皇帝たちを魅了し、マクシミリアン2世とルドルフ2世の二代の皇帝に仕えたのであった。

アルチンボルドの特異な芸術の源泉についてはさまざまに論じられている。画業初期の地であるミラノでルネサンスの巨匠レオナルド＝ダ＝ヴィンチが活動し、その影響が色濃く残っていたことも重要であった。ダ＝ヴィンチは自然観察を重視していたが、おそらく彼の追随者たちとの交流を通じアルチンボルドもその教えに触れ、写実的な自然描写をきわめていったと考えられるからである。さらにダ＝ヴィンチは人物の醜悪な顔貌をとらえた素描や、顔を醜く戯画化した素描を残していた。

これらの奇怪な頭像は、アルチンボルドの人物像を先がけるものであったと指摘されている。画家が活躍したマニエリスムの時代には、ユーモアや機知を効かせた奇抜な芸術表現が登場する。この傾向がアルチンボルドの奇想をこらした寄せ絵の頭像にも見いだせるのである。

さらにアルチンボルドが宮廷画家であったことも独自の絵画の形成に重要であった。この時代に王侯貴族たちは貝や貴石、自動機械など自然物、人工物を問わず珍奇な品々を競ってコレクションしていた。アルチンボルドが仕えた神聖ローマ皇帝も宮廷に「驚異の部屋」をつくりあげ世界各地の珍品をおさめるだけでなく、生きた動植物のために植物園や動物園を整備していた。こうした場所に入りを許されたアルチンボルドは描写対象をつぶさに観察し、作品の構想を練ることができたのである。多様な事物からなる彼の寄せ絵は雑多な品々が収集された、世界の縮図ともいえる「驚異の部屋」に通じるものとなっている。

さて本作に戻ろう。実りを迎えた四季折々の野菜や穀物、花々によって、四季や四季の変化をつかさどる神ウェルトウムヌスがかたどられている。ここでは四季の支配者たる神に世界の支配者たる皇帝が重ねられ、豊かな実りのイメージを通して皇帝の統治がもたらす平和と繁栄が賞賛されている。本作は一見すると植物が寄せ集まった奇妙な人物像に見えるが、皇帝を称揚する意味合いの強い作品なのである。ルドルフ2世を喜ばせた本作はこのたび東京・渋谷のBunkamura ザ・ミュージアムで開催されている「神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ2世の驚異の世界展」に出品されている。皇帝の愛した珍品も展示された本展は、アルチンボルドの作品とともにその芸術を生み出した当時の文化的環境に触れる絶好の機会となっている。

絵画が語る16世紀のヨーロッパと栽培植物の情報

—アルチンボルド『ウェルトウムヌスとしての皇帝ルドルフ2世像』を手がかりに—

福岡県立東筑高等学校 今林常美

16世紀という世紀は、世界史ではとくに魅力のある世紀である。この世紀、ヒトや国家が動き、モノが動き、さらに「銀」というカネが動き、ひいては時代が動いた。この時代を生きた人々にとっては過酷な時代であったかもしれないが、歴史学を学ぶ者にとってこれほど興味深い時代はない。その終了期に当たる16世紀末、ルネサンス精神を身につけた一人のイタリア人画家が、モノにこだわった大変おもしろい絵を描いた。ミラノ出身のハプスブルク家宮廷画家アルチンボルドがその人物で、おもしろい絵とは、ときの神聖ローマ皇帝を花、野菜、果物、穀物などの栽培植物で描いた、今回のテーマ作品である。本作を通してみえてくる、16世紀の世界の一端をのぞいてみたい。

まずは絵画の登場である。この合成肖像画は色なくしては鑑賞に値しない。カラーコピーした図版を生徒各自に配布して印象を聞き、題名を提示する。次に、解説にあるように本作が16世紀に流行したマニエリスムの流れをくむ作品で、キリスト教世界の支配者である神聖ローマ皇帝を四季の神になぞらえ、万物をつかさどる存在としてたたえた作品であることを説明する。そのうえで、画中の野菜のなかに、大航海時代にヨーロッパに伝わった作物が4種類あることを指摘し、生徒に画中の「野菜」探索をうながすことにする。手がかりとして、『明解世界史図説エスカリエ 九訂版』（以下、エスカリエ）p.121の「コロンブスの交換」の表を示し、このなかから3種を探すように指示をする。おそらく、まず気づくのは肖像の胸元に位置しているかぼちゃで、次にその左下にとうがらしが、さらに肖像の左耳として描かれているとうもろこしに気づいてくれるだろう。あともう一種とは何か、これはこちらで指定しないと確認できないかもしれない。今日、広くヨーロッパに普及しているズッキーニで、肖像の首右側を構成している。ちなみに首の真ん中はかぶ、左側はなすである。これら4種の野菜のうち、とうもろこしについては、やがてこのとうもろこしが世界中に広まり、16世紀末当時、“17世紀の危機”を迎えつ

つあったヨーロッパで他の穀物より圧倒的に収穫率の高いこの作物が貧民層の食料として受け入れられたことを指摘しておきたい。

気になるのはとうがらしである。肖像画全体のなかでは右肩のカーネーションから始まって、タチアオイ、白バラ、チューリップ、アーティチョークとつながり、左肩のたまねぎにいたる部分は、皇帝の首かざりとして作者が描いたと想定できるが、なぜ、その中心に近いところに赤とうがらしを入れたのか。ここからはあくまで筆者の推測にすぎないが、とうがらしはその強いからみゆえに当時、一部の地域にしか普及せず、観賞用として栽培されていたが、その形状からハプスブルク家出身の神聖ローマ皇帝のシンボルともいえる「金羊毛騎士団」勲章ペンダントとして使ったのではないかと考えられるのである。なぜなら、そのペンダントは「ぶら下がり羊」を彫金したもので、そのイメージでここに描いたのではないかと思われるからである。生徒には、本画と同じ所蔵先にあるルドルフ2世の肖像画模写を拡大したカラー図版を提示して、「ぶら下がり羊」のペンダントを確認し、自説の妥当性を考えてもらうことにする。この説が正しいとすれば、「ハプスブルク」皇帝を代表する表象の1つが、大航海時代に新大陸から伝わった栽培植物を用いて描かれるという、16世紀らしい試みがなされていたということになる。

最後に本画がなぜスウェーデンの城に所蔵されているのかを生徒に考えさせたい。17世紀前半の神聖ローマ帝国内では三十年戦争（エスカリエ p.127）という、16世紀宗教改革の負の遺産といってもよい宗教戦争・国際戦争が続いていたことに生徒が気づいてくれば、この投げかけは成功である。ウェストファリア条約の交渉が行われた1648年、プラハ城に入ったスウェーデン軍は宮殿内の絵画や財宝類を軒なみ持ち去っていったのである。その略奪品のなかにこの作品もあったようで、その後の経緯は不明であるが、現在は17世紀後半に軍人貴族の邸宅として建てられたスコークロステル城に所蔵されるにいたっている。